

大学史とその活用・効果について

／「資料・年表」の重視と外部専門家を活用し編纂することの意味

[拓殖大学創立百年史編纂室]

武 田 秀 司

<目 次>

1 大学史編纂の態様

- (1) 一般的構成 (2) 判型 (3) 編纂期間 (4) 編纂組織等
- (5) なぜ、大学史は難しいか

2 大学史の在り方

- (1) 大学の足跡・事跡、研究実績を明示するもの (2) 宣伝媒体になる
- (3) 記念品（物）になる

3 活用・効果

- (1) 経営者が考えること (2) 読者が考えること (3) その他

4 今後進むべき方向性

- (1) 「資料、年表」編及び索引のもつ意味 (2) 編纂するタスクフォースの編成の仕方

1 大学史編纂の態様

(1) 一般的構成

大きく分けて、「通史」と「資料・年表」という構成である。

これが一体化されているか、分離独立しているかで、タイプが分かれる。

「一体化」した型では、資料はそれほど重要視されていないといえる。大学沿革を記述する上で根拠を示す、あるいは時代を示す効果材料として使用される。資料の収録件数は、限定される。

「分離独立」した型では、「通史編」「資料編」それぞれに存在意義がある。「通史編」は、正史として時の経営者の意向を受けた内容で編纂される例が多いと考えられる。教員、職員が一体となって編纂を進める例が多い。「資料編」は、事実を示すもので、その時の経営者（集団）の意向に関わりなく編纂される。事務局職員が主力

となって編纂事業が推進されることが多い。

近時、「分離独立」型が主流になっている。

(2) 判型

これまで刊行された大学史を見ると、A 5 判が最も数が多く、次いでB 5 判である。最近、世のA判化の波に乗って、A 4 判の大学史が刊行されるようになってきた。

造本的には、圧倒的に上製本を採用する例が多い。

A 5 判は、立派なA判であることを認識すべきである。縦書き横書きの割合は、まだ縦書きが主流である。公文書が横書きに統一されて久しいが、資料の総数に占める割合からまだ資料は、縦書きにする例が多いと考えられる。横縦移行（横書きから縦書きへ）は、いくつかの考え方があり、各大学の公文書式例に従うことがひとつの方法であろう。

(3) 編纂期間

百年史を例にとれば、巻・編構成にもよるが、ひとつの目安として10年というのが巷間伝わっている期間である。10年間で編纂することに計算するものだが、実際にはガイドラインを大きく超えて3～5年延長しているのが実情である。百年未満の大学史は、5年という期間をひとつの目安としているらしい。

百年史において、巻・編構成にもよるとしたが、これは、百年史は、資料調査に当たって原点に立ち戻って作業を始めるため、既存周年史に新しい年代分を追加するという考え方で編纂しないからだ。

最近、索引は通史におけるのみならず、資料編においても求められる状況にある。確かに、大部になればなるほど、目次から資料を探すだけでは、徒らに時間を費やすことが考えられ、当然といえば当然の話である。1、2巻程度でも項目拾い出しに1年を要するものという覚悟がいる。検索項目の並べ方は、しっかりとした方針を考えて決めなければ、索引の用をなさなくなる。

(4) 編纂組織等

通常、編纂委員会→編集委員組織→編纂事務局という3段階の組織を設ける例が多いであろう。これに、重みを持たせるあるいは困ったときの助けに、顧問や編集代表

(名義のみ) といったポストを設ける。

また、大きく分けて内製方式と外部委託方式（アウトソーシング）とがある。内部の人員に外部ソフト会社を混在させて制作するジョイント方式も一考に値する。

(5) なぜ、大学史は難しいか

これまで、文書管理・保存のシステム化（方式）が立ち遅れていることが、最大の問題点であると考えていた。しかし、大学における文書保存は、しっかりしているものだ。よく、文書保存が徹底していないから、あるいは、発見できた資料だけで資料編を構成するとか、学則など規程（「規定」は誤り）類は、制定当時と最新内容のものを並べて“お茶を濁す”的なことをしてきた。このことが「最大の問題点」の根拠である。

「事実を語れるのは資料である」、という視点に立つならば、始点と終点だけをもって資料のすべてであるように見せる編集は、邪道ではないか。学内の隅々までを見て歩くことが肝要と思う。

「資料編」の編集は、事実の羅列を原則とすべきものである。すなわち、非常に根気を必要とする。これまで、資料編をしっかり編むということが少なかったのは、華やかさに欠け、また脚色ができないところが要因の一端であろうか。資料編は、不足があれば、読者に気付かれやすいので、私心を加えては編めない。

「通史」は、資料編とは対照的に、華やかさがある。創立（設立）から現在までを通観して自分の表現を示すことができる。大学の足跡に執筆者の評価を示すことができる。しかし、実際には、資料に目を通していないと事実誤認が発生すると可能性がある。したがって、資料整理完了又は資料編の完成を待って、執筆作業に入ることになる。資料編編纂編集作業の進捗によって、自己の作業スケジュールが規定されることになる。

2 大学史の在り方

(1) 大学の足跡・事跡、研究実績を明示するもの

大学史において何が大事かということである。輩出した卒業生がどう社会の役に立っているかということは、ひとつの評価ポイントになる。

大学は、本来研究業績と卒業生の社会貢献度によって評価されるべきものであろう。

研究と教育業績を上げるために施設設備の整備を行ったこと、個々の研究分野での成果発表に関する評価で大学の価値が決まる。

(2) 宣伝媒体になる

内容のしっかりした大学史は、在学生卒業生をはじめとする大学関係者、受験生その他読者に強烈な感銘と感動を与え、その大学に興味を持たせる効果がある。

大学史は、「紀要」によって発表した研究成果の一覧的裏づけ、大学総体としての成果・実績の誇示の役を果たす。

(3) 記念品（物）になる

周年式典で配布することにより、記念品としての意味を持つ。

卒業生が所有すれば、自らのバックボーンとして存在をなす。

3 活用・効果

(1) 経営者が考えること

学生に当該大学の建学の精神をはじめ、脈々として受け継がれる基本方針や実績・業績を示し、学生自身が選んだ学び舎に対する愛着心の涵養に役立つ。愛着心は、愛校心に通じる。だから、「自校(史)教育」が行われるようになってきたといえる。偏差値により志望校を選択し、入学してくる学生が増え、入学した大学について何も知らないという学生が増えていることも「自校教育」が必要になっている要因である。

「自校史」という用語、本来「学校史」「大学史」「校史」と呼んでいたものが自分の所属する学校の歴史（沿革史）を編むというので「自校史」となったものであろう。個人でいえば、「自伝」というところを「自分史」といい、これは自費出版を生業とする出版社サイドで作り出した用語である。誰でも自己の足跡を記録して本にまとめることを勧める、まさに営業的発想からきている。肩肘張らずに、原稿用紙に向かえるよう平易にしたものである。

学校の価値の理解に長けた学生を育てることで、大学の基盤は強化される。同窓会組織を通じ、強固な組織づくりができる。

大学ブランドを示す格好のメディアである。実績・成果をもとにブランドを誇示することができ、あらゆる広報活動の源泉としての位置付けをなす。

参考として添付した資料から抜粋すると、

- ① 平成18年5月21日付産経新聞によると「愛校心を育てようと、自校の歴史を学ぶ『自校教育』を講義に取り入れる大学が相次いでいる。…」とあり、11大学（国立3校、私立8校）をサンプルに掲げている。

薄れる愛校心 講義で鼓舞

大学の歴史や校歌…早慶戦観戦必修まで

■自校を学ばせる大学の主な講義

九州大	「九州大学の歴史」
名古屋大	「名大の歴史をたどる」
北海道大	「北海道大学の人と学問」
青山学院大	「青山学院大学の歴史」
関西学院大	「関学学」
慶応大	「慶應義塾入門」など
上智大	「上智大学のルーツとアイデンティティ」
中央大	「中央大学と近代日本」
同志社大	「建学の精神とキリスト教」など
明治大	「日本近代史と明治大学」
早稲田大	「早稲田を知る」

※大川一毅・秋田大助教授の平成17年8月の調査を基に産経新聞の取材を加えた

- ② 全国大学史資料協議会研究叢書第5号『年史編纂の現状と展望』所収「自校史教育を考える—立命館大学の場合—（芦田文夫教授〈当時〉）」には、「私たちの自校史教育……『大学改革』のなかで、それぞれの大学のアイデンティティともいえるべきものを、いわば縦の歴史のなかに、そして横の歴史ともいえる全国の諸大学での取り組みとの対比のなかに、私ども立命館の歴史をどう位置付けていくか、立命館の100年の歩みをどう特徴付けていくかという、そういうことが開講の趣旨でありました。」「私達の自校史教育は、『立命館百年史』の編纂と密接に関わらせて、立命館百年史編纂室が母体になって取り組んでいます。」
- 編纂作業を進める中で、「研究会」を開いていると言い、「この研究会で出された様々な研究資料、これが自校史教育のレジュメになっております。……冊子を作りまして、これを学生諸君に前もって配布して講義前には目を通すようにしてもらっています。『立命館百年史』第1巻～第3巻が刊行される前後には、新書判程度の読みやすい『立命館小史』（仮

称)を発行してはという話も出ており…。」「(問題提起)その第1点は、何よりもこれは自校史教育という講義、つまり学生に対する教育ですから、この講義を通じて学生に何を学ばせるのか、何を彼らに投げかけるのか、ということに関する問題があると思います。」

「次に第2の問題です。私達の大学は、『日本近現代と立命館の100年』というテーマを設定…。この趣旨は、立命館を通して日本の近現代を見る、あるいは日本の近現代の中で立命館を見る、という狙いなのですが、問題は、……近現代全体と、同時にその中で日本の高等教育や大学の在り方、大学論、そして我々の所は私学でありますから私学論ですね、これらの比重をどういうふうにとっていくのかという問題があります。」「最後に3番目の問題提起です。我々が大学史の編纂、あるいはそれに基づく『大学史』の講義をやっていく場合に、それが現実に大学の中でどのような位置をもっているだろうかということに関わる問題であります。……とりわけ多くの教職員に、ここでの課題を、どういうふうに投げかけて共有化していくのかという課題です。そして、『大学改革』と一緒に考えて頂く力をですね、大学の中でどういうふうに醸成していくのか、これが非常に大切なことだと私はおもっております。」

※拓殖大学では、百周年を迎えた2000年10月、新書判の『世界に天駆けた夢と群像 拓殖大学百年・小史』を刊行し、これをレジュメにした講義は行っていないが数年間学生に配布した。この本は、『拓殖大学百年史 通史編・資料編』の編纂の前に発刊されたものである。2006(平成18)年6月現在、同百年史は、資料編6巻及び部局史が刊行され、計画ではあと4巻の資料編(年表を含む)、通史編が予定されている。

- ③ 東洋協会専門学校同窓会編『同窓会報 第6号』(明治44年6月)の「校風論」から引用すると、「国家に国風一家に家風があつて始めて其風習を形造り真の発展を図るに最も其影響を逞するものである曰はば柱石である柱石なきものは永遠に長足の進歩確固の発達を遂ぐるとは勿論六ヶしいのである」と冒頭に言い、「校風の建設に欽くべからざる二つの要素がある 一つは偉大なる人格で他は是に感化され統一され同化さるべき学生である」とする。続いて例を挙げ、「…新島先生の下に於ける同志社、大隈伯の下に於る早稲田、福澤先生の下に於ける慶応義塾クラーク氏を戴ける札幌農学校新渡戸先生を戴ける向ヶ岡に於けるは著じるしき実例である」「校風の維持発展は実に『後継者たるべき者の歴史的責任なり』と斯くの如く考へれば校風自身時に衰ふる事あるときも滅亡することはない。この点に於て『校風の歴史は正に一国の精神的歴史と同一である』忠君愛国の念に富みたる我國民により二千五百有余年を一貫して大和魂が維持發揮された如くに校風は即ち後継者によりて永久の

生命を有するものである 嗚呼福澤先生を失ひし慶應、クラーク氏の去った札幌農学校遠く
洛陽の地加茂の流れ比叡の山！新島先生を失ひし同志社の現状を見て転々懐旧の念に堪えな
いのである」と結ぶ。

ソフト面での財産保管庫の役を果たす。

(2) 読者が考えること

学生からすれば、自分が選んだ大学が、実際どのようなものであるか（偏差値至上主義で受験するため）不安になるものであるが、これを解決するに足るものである。

「スクールカラー」が理解できる。当該大学の色合い、建学の精神や教学指針がどこまで具現されているかなど、汲み取るべき事柄はたくさんある。ブランド力を感じ取る材料でもある。

上記（1）で述べた大学が実践する自校(史)教育の成果を体得できること。

(3) その他

配布先が多岐にわたるので、記録の保存としては、最適である。

天変地異にも対応可能である。

「大学案内」パンフとは比較にならない情報量をもち、最大の大学PRツールである。

4 今後進むべき方向性

(1) 「資料、年表」編及び索引のもつ意味

現代は、ブランドの時代である。個々の大学がブランド力を競う時代に生きているということである。建学の精神がブランドとなりえるか否かは、大学の事情にもよるのである。

各大学ともに文部科学省が推し進める「国公私『トップ30』」のように選ばれた大学になる方策、選ばれるには何をどうすればよいのかを求めていることに違いはない。

私学は、寄附行為による財源はあまり多くなく、助成金に頼る現状からすれば、止むを得ない。

これまで、きちんとした大学運営を為してきた大学と護送船団方式に便乗してきた

大学との明確な線引きが大学史の世界にも行われる日が来るだろう。

だから、今、大学が何をおいても作らなければならないのは、「資料編（集）」である。1日1日積み上げてきた事実は、嘘をつかない。これが、大学淘汰から大学自身を護る道といえないだろうか。

資料編は、正史にならないということを理解すべきである。資料が示す事実は、大学にフィードバックのチャンスを与えてくれる。そして、将来を展望するに視野を広げさせてくれるものである。「資料」のもつ重要性について、重ねてアピールしたい。

続いて、「年表」が重みを持ってきた。大学ブランドの足跡記録の一覧という機能である。

研究成果の発表時期など、一覧で参照できる強みは、大学にとって重要なアイテムである。

今まで、さほど気にかけることのなかった「索引」、これもこれから重要性を増すものだ。年表も索引も「資料編」としてのものをいい、通史編におけるものではない。

「資料(編)索引」の重要性は、今のところ編纂関係者の間でもあまり注目されていない。これまでの“間に合わせ”的な資料編であれば、索引は必要ない。現在求められている資料編にあっては、索引は必須である。「人名索引」「事項索引」というふたつのタイプが考えられるが、索引の編集・作成方針については、細かい話になるので、ここでは割愛させていただく。これら索引の重要性は、いずれクローズアップされるものと信じている。

(2) 編纂するタスクフォースの編成の仕方

[複数の外部専門家を専従で参画させることの波及効果]

以上のことからすると、醒めた目で資料を見分けるために、第三者的立場の専門家を導入するということは、客観性が増し偏りのない大学史を編纂することができるといえる。また、収集された資料によって作られた資料編を生かした通史の素案を作るには、外部専門家の参画が望ましいということにもなる。先に紹介した「外部委託方式」を指しているのではない。内部の担当者の作成では、現経営者の意向や忖度が反映されやすい面を否定できないからである。そうした作品は後世から批判される対象になりやすい。時には、ダメ烙印を押され、書き改められる醜態を演ずる結果だって考えられる。そこに、現体制に利害を共有していない（感じない）第三者的存在が果

たすことができる役割がある。

ここでいう“外部専門家”とは、前述のとおり、いわゆる歴史家や歴史研究者を意味するものではない。歴史家などは、批評者として存在理由はある。ここで言うのは、他校の年史編纂の経験者を意味している。

通史原稿の素案は、確定稿ではない。第一次稿というもので、つまり第二次、第三次原稿へとレベルアップを想定したものを指している。しかし、この第一次原稿は、推敲過程で内部の経営陣や教学陣からどのような赤字が入ろうとも、執筆者に変更がない限り、基調はそう変わらない。歴史の記述で、最初の稿が果たす意味は大きい。

それは、以上の説明によって、大学史編纂には二つの特徴が見出せる。

その1は、資料編であれ通史編の記述であれ、技術的な側面がかなりあるということである。

その2は、資料を検分することにより、その大学の研究実績や教育による社会的な貢献度を、他大学と比較して客観的に評価しやすいことである。

当事者には、比較がもっとも難しい。

そうした経験者すなわち“外部の専門家”の参画が望ましいということは、十分に理解いただけたことと思う。

この小編が、後世の批評に耐えうる大学史編纂事業の成果品を示す上で、少しでもお役に立つことを願って止まない。

以上

<平成18年6月24日 FMICS月例会にて>